

國學院大學學術情報リポジトリ

菅原道真「讃州客中詩」について：
「行春詩」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 波戸岡, 旭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001426

菅原道真「讃州客中詩」について

—「行春詞」を中心に—

波戸岡 旭

論文要旨

菅原道真は、仁和二年、四十二歳の時、文章博士から讃岐守となった。道真は、これを左遷同然と受け止めて不遇を託ち、悲嘆した。しかし、任国においては、国司の職務に精励努力した。それは、讃岐での詩（「讃州客中詩」）によって知られるとおりである。道真にとって「讃州客中詩」は、「諷諭」の詩の

性格が強く、宮廷宴詩の詩群が王沢讃美の「雅」の詩であることと双壁をなすもので、彼の作詩活動全体の二大支柱をなすものである。本稿は、特に「行春詞」を中心に、国司任務の精励ぶりについて考究したものである。

一、前言

菅原道真は、仁和二年（八八五）四十二歳の時、文章博士から讃岐守となった。道真はこの任官を左遷同然と受けとめて我が身の不遇を託ち、胸中悲嘆し続け、任国讃岐において旅愁・孤愁・懷郷の悲哀を多く詩に詠みもしたが、むろん、在任中、国司の職務に精励努力したことはいうまでもない。しかし、その政務精励の事跡を物語る直接の史料などの手がかりは現存しない。そして、たとえば「路遇白頭翁」の掉尾「欲学奔波身最嬾 将随臥聴年未衰 自余政理難無変 奔波之間我詠詩（奔波を学ばんと欲するも身最も嬾く将に臥聴に随はんとするも年未だ衰へず 自余政理変無きこと難し 奔波の間我詩を詠まん）」に見られるがごとき、道真の慨嘆ぶりや謙遜的表現をそのままに解釈して、道真の任務遂行が真面目ではあっても積極的ではなかったとの見方をする歴史家も少なくないよ

うである。

けれども、この讃岐守在任の間（仁和二年―寛平二年（八八六―八九〇）・道真四十二歳―四十六歳）に詠まれた詩（仮に「讃州客中詩」と呼ぶ。約百四十首）には、国司としての政務に励むさまを詠んだ詩、国司として巡察し、実地に見聞した庶民の暮らしぶりの実情・実態を克明に詠んだ連作の詩などが三十首余ある。これらの作品の詩境と詩の真意とをつぶさに読み解くとき、讃岐守菅原道真の政務精励ぶりが見えてくるのである。^①

ことに国司の任務の一つである勸農巡視を主題にして詳細に詠んだ「行春詞」は、道真の謹直な政務精励ぶりが窺えるもので、他に類を見ない特筆すべき詩であろう。^②

治国内の貧苦の庶民の実情を詠むことは、和歌では、山上憶良の「貧窮問答歌」の先例はあるが、それに加えて国司としての政務の遂行の様子や、国司としての貧苦の庶民に対する心情をつぶさに詩に詠むというのは、きわめて珍しいといえるのではないか。^③

道真は、後年昌泰三年（九〇〇）、五十六歳の時、醍醐天皇に菅家三代の家集を献上したが、その上奏文中に、「今之所集、多是仁和中、讃州客意、寛平以降、応制雜詠而已」と述べたが、この時、道真にとって、この讃州客中の詩群は、宮中宴詩の詩群と双璧をなすものと自負していたことが分かる。すなわち、道真詩においては、讃州客中の詩群は「諷諭」の詩であり、宮中宴詩の詩群は王沢讚美の「雅」の詩であって、これが道真詩の詩観の二大支柱をなすものであったといえるであろう。このことから見ても、「讃州客中詩」群は、詩人道真にとって大きな意義をもつものであったのである。

本稿は、道真の讃岐守時代の詩について、ことに「行春詞」を中心に、その国司任務の精励ぶりについて考究する。

二、若き日の道真が描いた良吏像

貞観九年（八六七）、道真二十三歳の春、正六位下・下野権小掾に任ぜられる。が、これは実際に任地に赴くものではなかった。この頃の作に^④「喜雨詩」がある。この詩の題注には「龍を以て韻と為す。八十字を限る。句毎に漢代の良吏の名を用ゐる」とあって、詩

の毎句に漢代の良吏の「姓名」の「名」を折り込んでいる。これらの官吏は道真にとって規範とすべき理想の良吏像であったと思われる。その良吏とは、朱博（卷八十三）「朱博鳥集」、薛宣（卷八十三）、兒寛（卷五十八）、汲黯（卷五十）「汲黯開倉」、諸葛豐（卷七十七）「葛豐刺拳」、朱邑（卷八十九）、王城（卷八十九）、蕭育（卷七十八）「蕭朱結綬」、何武（卷七十八）「何武去思」、公孫弘（卷五十八）「漢相東閣」、杜延年（卷六十）、趙廣漢（卷七十六）「廣漢鈎距」、龔遂（卷八十九）「龔遂勸農」、王尊（卷七十六）「王尊叱馭」、尹翁歸（卷七十六）、馮立（卷七十九）。以上の十六人の名が各句に折り込まれている。*上記の巻数はすべて『漢書』であり、「」は『蒙求』掲出の題名である。

慈雨によって豊作の秋を予祝するという主旨の詩に、良吏の名を詠み込むことは、詩作上の知的遊戯にすぎない。が、とは言え『漢書』『後漢書』を家学として習熟している道真ならではの修辭技巧と言えるであろう。

また、貞観十一年（八六九）、道真二十五歳の春、(44)「花下餞諸同門出外吏、各分一字」の詩は、菅家廊下の同門が地方官吏として赴任するのを送る送別詩であるが、その絶句の結びに「万里程の間一たび轅なぐさを折くじかれんことを 万里程間一折轅」と詠んだ。これは、『後漢書』卷五十六「侯霸」（『蒙求』「侯霸臥轍」）に、善政を施した侯霸が、任務を終えて召喚されるとき、百姓たちは「轅に攀ち轍に臥して」留まらんことを願ったという故事を踏まえているのである。このように若き日の道真は、良吏・能吏という理想像を菅家の学である『漢書』『後漢書』によって学んでいたのであった。

三、讃岐守菅原道真的詩境

仁和二年（八八六）、菅原道真四十二歳、讃岐守の拝命を左遷と受け取って悲嘆に暮れながら任地に赴いたのであったが、その年の秋、国守道真是重陽の日に官舎において小飲を催し次の詩を詠んでいる。

(197) 重陽日府衙小飲

秋来客思幾紛紛 秋来りて客思幾ばくか紛紛たる

況復重陽暮景曛

況んや復た重陽暮景の曛ずるをや

菊遣窺園村老送

菊は園を窺ひ村老をして送らしめ

莫從任土藥丁分

莫は土にまかせて藥丁の分つに従_よる

停盃且論輸租法

盃を停めて且らく論ず租を輸す法

走筆唯書弁訴文

筆を走らせて唯だ書す訴を弁ずる文

十八登科初侍宴

十八にして登科し初めて宴に侍り

今年独对海辺雲

今年独り対す海辺の雲

この詩の結聯にあるように、道真は讃岐在任中、何彼につけて都を想い宮中を恋しがっている。ことにこの重陽の日は、若き頃初めて参席を許された宴であつたので格別の想いがあつた。それゆえ、都を恋慕し、その悲しみのあまり「今年独り対す海辺の雲」と孤独を託っているのである。このような道真の心境から推し量ると、道真の讃岐での治政はとかく消極的であつたかのようにも思えてくる。しかし、「盃を停めて且らく論ず租を輸す法 筆を走らせて唯だ書す訴を弁ずる文」と、宴のさ中であつて、租税の取り立て方を論じさせたり、民からの訴状の判決などを話題にしたりしているのは、いかにも無粋で厭わしいことであつたはずだが、道真は煩わしく思いつつも、任務に励んでいるからこそ、このように詠んでいるのである。

この詩の数カ月後には、(200—209)「寒早十首」を詠んでいるが、この連作は、題注に「同じく人身貧頼の四字を用ゐる」とあるように、一般庶民の暮らしぶりではなく、道真が見聞した社会の最下層の貧民の困苦窮乏する実情を描述した作品群である。すなわち、(200)の「走還人」は、逃散した地から放還されてまた讃岐に舞い戻った者の悲惨さを叙したもので、「慈悲を以て繋がざれば 浮逃定めて頼りなるべし」と結ぶ。(201)の「浪来人」は、他国から逃散してきた人の悲惨さを叙したもので、「子を負ひ兼ねて婦を提ぐ 行く行く乞与頼りなり」と貧苦のさまを詠む。(202)の「老鰥人」は、老いた鰥夫の飢渴のさまを叙し、(204)の「夙孤人」は、孤児の貧苦悲歎のさまを詠む。これら四首に詠まれた者については、『律令』戸令に「鰥寡・孤独・貧窮・老疾にして自存すること能はざる者」を救済すべしとあるとおり、国守として救済の対象者を詠んだのである。そして、(205)「薬圃人」・(206)「駅亭人」・(207)「賃船人」・(208)「釣魚人」・(209)「売

塩人」・⁽²⁰⁹⁾「採樵人」の六首は、過酷不遇な使役に従事する人々の苦渋ぶりを描述する。こうした貧苦に喘ぐ人々の実情を詠んだ国守道真がどのような救済策を講じたかは詳らかではないが、その暗然たる実情を把握し詩とするところ道真の国守としての真摯な政治姿勢がよく分かる。一般庶民の農民や職人の世界よりもさらに底辺の社会層に目を向けているのである。

四、行春詞の構造

翌仁和三年（八八七）道真四十三歳の春、長篇の⁽²¹⁹⁾「行春詞」を詠む。「詞」は、楽府体であることを意味するが、この詩はまた七言排律でもある。讃岐守時代の傑作といえるものである。『菅家文章』の配列から推して、釈奠詩の前にあるので、二月三日以前の作と思われる。

「行春詞」の行春とは、春に太守が県を巡って農桑を勧める意である。『後漢書』「鄭弘伝」に「弘少かりしとき郷の耆夫たりき。太守第五倫行春し、見て深く之を奇とし、署督郵に召して孝廉に挙ぐ。弘少為郷耆夫、太守第五倫行春、見而深奇之。召署督郵、挙孝廉」とあり、李賢の注に「太守、常に春を以て主る所の県を行りて、人に農桑を勧め、乏絶を振救す。太守常以春行所主県、勸人農桑、振救乏絶」とあり、また、『律令』戸令の「国守巡行条」に詳しく説くところである。⁽⁴⁾

国守巡行については、道真自身も⁽²²¹⁾「路遇白頭翁」の詩中に、「春は春に行かずして春遍く達し 秋は秋を省みずして秋大いに成し」とあり、春秋の巡行が国守の政務の一つであることを自覚して詠んでいる。

道真の「行楽詩」は、以下、詩句の下に示したように、随所に『漢書』『後漢書』の良吏の記事を典故とする表現が見える。

なお、この詩については、先に三木雅博・谷口真起子両氏による「『行春詞』札記―讃岐守菅原道真の国内巡視―」の論文がある。以下の論はこれを参照した上で、私見を加えた論であることを予めおことわりしておく。

いま詩の構造を知る上で、全体を六段落に分けてみる。

まず第一段落は、春の巡行に対する国守の心構えを述べる。

第一段落 「行春と国守の気構え」

- ① 欲貌春風不受憎 春風の憎しみを受けざるを貌んと欲して
 ② 周流四望睇先凝 周流 四望して睇ること先づ凝らす
 ③ 才愚只合嫌傷錦 才は愚かにして只だ合に傷錦を嫌ふべく
 ④ 慮短何為理乱繩 慮は短くして何すれど乱繩を理めん
 ⑤ 慙愧城陽因勇進 慙愧らくは城陽に勇に因りて進まんことを
 ⑥ 庶幾馮翊以廉称 庶幾はくは馮翊が廉を以て称せられんことを

『楚辞』「離騷」「九歌」
 『春秋左伝』「襄公」「子産」
 『漢書』「循吏伝」「龔遂」
 『後漢書』「劉祉」
 『漢書』「黄覇」

春風の憎しみを受けざるを貌んと欲して 周流 四望して睇ること先づ凝らす」この①②句の解釈は「春風が人々から好まれるように自分も春風のようになって、国内をあまねく巡行し、目をこらしてしっかり世情を見ようと思う」との意。ここの「春風」は、たとえば、『宋書』「樂志」の「威厲秋霜、惠過春風」とあるように、惠風のことであり、道真もこの詩の前に(216)「正月二十日有感」に、「寒氣遍身夜涙多 春風為我不誰何」と用い、また(218)「春日尋山」に、「従初到任心情冷 被勸春風適破顔」と、春風を好ましい惠風として詠んでいる。このように惠みをもたらす春風の徳をもって巡行しようと歌い出しているのである。なお、韻字の「憎」の字は、句意に意外性をもたせるためにあえて用いたものであろう。

③—⑥句は、「けれども自分の才覚は愚かなので、政務に習熟しないまま国務に就いて仕損なつた尹何のようになりはせぬかとおそれ、思慮も浅はかなので、かの能吏の龔遂のように民をよく治めることはできないであろう。恥じいることには、劉祉のように武勇によつて進み出る力がないこと。せめてどうか馮翊に任じられた黄覇のように、清廉な政治をした者と称せられたいものだ」の意。ここは、道真自身の非才を嘆いて悲觀のかつ謙遜の表現を連ねるが、これは修辭上のことであつて、国守政務の不安とか不満を述べたのではないと思われる。すべては、こうした良吏たちを目標とするとまでは行かずとも、彼らの功績を胸中に思いながら、政務に精励してゆくという国守としての氣構えを述べたものと言えるのではないか。

第二段落 「巡行の様子」

- ⑦ 莓苔石上心陸沈 莓苔の石上心は陸に沈み
 ⑧ 楊柳花前脚履氷 楊柳の花前脚は氷を履む
 ⑨ 辞謝頑民来謁拝 辞謝す頑民の来たりて謁拝するを
 ⑩ 許容小吏送祇承 許容す小吏の送りて祇承するを
 ⑪ 繞身文墨徒相逐 身を繞る文墨 徒らに相逐ひ
 ⑫ 任口謳吟罷不能 口に任す謳吟罷むること能はず
 ⑬ 事当資仁義下 事 事 当に仁義の下に資るべく
 ⑭ 行行且禱稲梁登 行行 且に稲梁の登ることを禱らんとす

この段の詩意は、苔むした堅い石の上を歩いていても、心は重く地中に沈んでゆくかのように気が塞ぎ、やわらかな楊柳の絮花の前を通っていても、戦線兢兢として氷の上を踏むがごとく足のすくむ思いがする。頑固な民たちの拝謁は辞退するが、下役人たちの奉仕はまあ許すでしょう。身のまわりの筆硯を用いてそぞろに詩を書き、口について出るままに詩句を歌ってつきることがない。一事一事に情を厚く筋を通して民をたすけてやり、巡行のみちすがら今年の稲の豊作を祈るのであるの意。

この段では、まず「陸沈」「履氷」の典故を用いて巡行時の不安と緊張とを述べるが、この表現によって詩意の緊張度を高めているのである。ついで巡行時に直接拝謁を願い出てくる民人たちを「頑民（『書経』「多士」）」と称し、それを「辞謝」するというのは、旧弊を改めもせず直訴してくる頑迷な民には会いたくないという意だが、これは、つまり巡行時にはそうした民の訴えが絶えなかったことを意味している。そして郡司たちの接待も拒みたいところだが、些少のことなら許容してもよいのであって、両句とも巡行時の煩わしさを述べたものである。こうした煩わしい巡行時中にも、みずからの心を晴らすべく詩を書き付け、口ずさむとあるのは、詩人の業なのであろう。そして、国守の務めである「農功を勧め務めしめよ」（『令義解』「国守巡行条」）を踏まえ、巡行しながら所々の寺社に豊作を祈願する、とある。

第三段落 国司の政務精勵

⑮ 靈祠怪語年高祝 靈祠に怪語するは年高き祝

⑯ 古寺玄談臈老僧 古寺に玄談するは臈老の僧

⑰ 過雨経営修府庫 雨を過ごして経営して府庫を修め

⑱ 臨煙刻鏤弁溝塍 煙に臨みて刻鏤して溝塍を弁ふ

⑲ 遍開草褥冤囚録 遍く草褥を開いて冤囚を録し

⑳ 輕拏蒲鞭宿惡懲 輕く蒲鞭を挙げて宿惡を懲らす

『後漢書』『劉寛』『蒙求』

この段の詩意は、靈驗あらたかな神社では長老の神官が摩訶不思議な話をしてくれ、古刹では長老の僧が奥深い仏教の教義を語ってくれた。巡行途中の雨を過ごして、あちこち奔走して国府の倉庫を修繕し、夕暮れの霽が立ち込めるまで田畑を調査して記録する。冤罪があるかを確認するため牢獄の囚人を調べては、悪行や不正の者を寛容の心を持って懲罰するの意。

巡行時には、頑迷固陋な民人や媚び諂いの郡司を相手にするだけでなく、寺社に巡拝して祈願し、またその長老の神官や老僧と高談を交わしたというのである。それは、道真にとって心洗われるひと時であったと思われる。^⑰—^⑳は、国司のなすべき政務を具象的に仔細に述べる。実務を忠実謹直に実行し、劉寛のように寛容な政治を行っている、というのである。

第四段落 貧窮の民の実情

㉑ 尊長思教卑幼順 尊長は卑幼を順はしめんことを思ひ

㉒ 卑貧恐被富強凌 卑貧は富強に凌げられんかと恐る

㉓ 安存耄邁飡非肉 安存す耄邁の飡の肉に非ざるを

㉔ 賑恤孤惸餓曲肱 賑恤す孤惸の餓ゑて肱を曲ぐるを

㉕ 檻樓家門留問主 檻樓の家の門には留まりて主を問ひ

㉖ 耦耕田畔立尋朋 耦耕の田の畔には立ちて朋を尋ぬ

『論語』『述而篇』

『論語』『微子篇』

この段の詩意は、身分高い者が卑しく弱い者を無理に従えようとしてはいかと憂慮し、独り身の貧しい者が富裕で権勢を誇る者にしいたげられていないかと心配する。肉を食べることのできない貧しい老人を慰問し、身よりのない貧窮者に救助の手を憐れんで援助する。檻樓を纏った人のいる家の門では立ち止まって主人に（どうしてこんなに困窮しているのかと）問いかけ、畑で耕している人には仲間はあるのかと尋ねてみる、という意である。これらは、国司の任務遂行を仔細に述べたものである。「戸令」鰥寡条に「凡そ鰥寡孤独、貧窮老疾の自存する能はざる者は、近親をして収養せしめよ。若し近親無くんば、坊里に付けて安恤せしめよ」に拠るところである。

第五段落 国司としての声価

②7 遊童竹馬郊迎廃 遊童の竹馬は郊迎を廃し

『後漢書』「郭伋」

②8 隠士藜杖路次興 隠士の藜杖は路次に興す

『蒙求』「原憲桑扈」

②9 冥感終無馴白鹿 冥感終に白鹿に馴るること無く

『後漢書』「鄭弘」

③0 外聞幸免喚蒼鷹 外聞幸ひに蒼鷹と喚ばるることを免る

『史記』「酷吏列伝」

③1 応縁政拙声名墜 応に政の拙きに縁りて声名の墜つるなるべし

③2 豈敢功成善最昇 豈に敢て功成り善最に昇らんや

この段の詩意は、子供たちは竹馬で遊んでいて、郭伋の故事のように国司が来たからと郊外まで迎えることはしないが、あかざの杖をつく隠者は通りに杖を上げて挨拶してくれる。天が感応して鄭弘のように白鹿がついてくるようなことはついにないが、しかし、私の国内の評判は幸い蒼鷹のような冷酷な酷吏とは言われていないようだ。とはいえ、私の治政は拙いので名声は揚がることはないであろう。どうして私の実績が「善最」と評価されることがあるのか、ありえないことだ、の意である。国司としての道真に対する民の評判は、幸い悪くはなさそうだが、古の能吏たちのような高い声価は望めない。可もなく不可もなくというところか。いや、それどころかおそらく治政の拙さによって声名が墜ちるに違いないとも不安に駆られる。そして、任期満了の後の考課すなわち勤務評定は、とても「善」や「最」の高い評価は得られないであろう、と悲観しているのである。だが、これは、むしろ道真自身は国司として高い

評価を得たいと願って、日頃、勤務に精励しているがゆえの表現なのである。表現上では悲観的であるが、それはむしろ「善」や「最」の評価を得たいとの願望を表明していることでもある。なお言うまでもなく「善」も「最」も「考課令」にある律令語である。

第六段落 巡行後の心境

③③ 廻轡出時朝日旭 轡を廻して出づる時朝日旭らかに

③④ 墊巾帰処暮雲蒸 巾を墊じて帰る処暮雲蒸したり

③⑤ 駅亭楼上三通鼓 駅亭の楼上三通の鼓

③⑥ 公館窓中一点燈 公館の窓中一点の燈

③⑦ 人散閑居悲易触 人散じて閑居すれば悲しみ触れ易く

③⑧ 夜深独臥淚難勝 夜深けて独臥すれば淚勝へ難し

③⑨ 到州半秋清兼慎 州に到りて半秋清兼た慎

④⑩ 恨有青青汚染蠅 恨むらくは青青たる汚染の蠅あるを

この段の詩意は、馬のくつわを転じて次の巡察地にむけて旅立つ時朝日は上り、頭巾だけは郭泰よろしく折れて宿舎に帰る時夕暮れの雲が湧きおこる。駅亭のたかどのの上では時を告げる三度の鐘鼓、公館の窓のうちには一点のともしび。人々がいなくなつてひとり静かに座っていると感傷的になって、夜更けにひとり臥していると涙の湧き上がるのがおさえられない。この讃州に着任して半年、私は「清」と「慎」の両方を心がけてきたが、残念なのは青く汚れた蠅のような輩がいることである、という意である。讃岐に赴任してはや一年近くになるのだが、詩では「半秋（半年）」としている。また、「青青たる汚染の蠅」は、『詩経』小雅「蒼蠅」を踏まえる語で、小人の意であるが、ここは、讃岐国内の貪吏および讒言をする佞臣を指すのであろう。国司として清廉に務め慎重に事を行つてゆこうという心構えを示して結ぼうとして、最後に、その自分を煩わせ邪魔する汚濁の佞臣がいることが忌々しいことを付け加えている。

以上、この詩は、国司としての気構えを述べ、行春という公務の実際を描述し、貧窮の民の暮らしぶりを描き、民の自分への評判のことに及び、行春を終えての心境を述べて結ぶ長篇の詩である。国司道真の生真面目さと意欲が良く窺える内容である。道真は、『史記』

『漢書』「郭泰」

『漢書』『後漢書』の能吏たちの行動を理想としながらも、現実になんかそれを実行するのは至難の業であることを痛切に感じたことであろう。これが任期一年目の道真の心境であった。

五、「路遇白頭翁」と「蘭菊翁問答詩」と

「行春詞」を詠んだ後、道真は、国学の孔子廟において積奠を行っている。

(220) 「州廟積奠有感」

一趨一拝意如泥 一趨一拝意泥の如し

罇俎蕭疎礼用迷 罇俎蕭疎にして礼用迷ふ

曉漏春風三献後 曉漏春風三献の後

若非供祀定児啼 若し供祀するに非ずんば定めて児のごとく啼かむ

「意泥の如し」とあるのは、祭具類が不備でお粗末なので礼が整わないのを、心憂いている、という意味である。大学寮で指揮をとっていた道真には、祭器も揃わないさびれた国学での積奠は不快なものであったが率先して催行したのであった。言うまでもなくこれも国司の大事な務めだからである。

また、同時期の作の(221)「路遇白頭翁」では、前々任者の安倍興行（元慶二年・讃岐介着任）と前任者の藤原保則（元慶六年・讃岐守着任）が善政を施したことを顕彰している。

(221) 「路遇白頭翁」

...

適逢明府安為氏 適たま明府に逢ふ安を氏と為す

奔波昼夜巡郷里 昼夜に奔波して郷里を巡る

〔「明府安為氏」は安倍興行のこと〕

遠感名声走者還 遠く名声に感じて走者還り

周施賑恤疲者起 周く賑恤を施して疲者起つ

吏民相對下尊上 吏民相對して下は上を尊び

老弱相携母知子 老弱相携へて母子知る

更得使君保在名 更に使君保の名在るを得たり

臥聽如流境內清 臥しながら聴くこと流るるが如く境內清み

春不行春春遍達 春は春に行かずして春遍く達し

秋不省秋秋大成 秋は秋を省みずして秋大いに成し

二天五袴康衢頌 二天五袴康衢の頌

多黍雨岐道路声 多黍雨岐道路の声

愚翁幸遇保安徳 愚翁幸ひに保安の徳に遇ひ

無妻不農心自得 妻無く農せずあるも心自らに得たり

...

安為氏者我兄義 安を氏と為す者は我が兄の義あり

保在名者我父慈 保の名在る者は我が父の慈あり

已有父兄遺愛在 已に父兄の遺愛の在ること有り

願因積善得能治 願はくは積善に因りて能く治むることを得んと

...

〔「使君保在名」は藤原保則のこと〕

『史記』「汲黯」

『後漢書』「廉范」

『後漢書』「張湛」

〔「安為氏者」は安倍興行のこと〕

〔「保在名者」は藤原保則のこと〕

このように前任者の功績を顕彰することもまた、現国司としての務めと言えるであろう。そして、詩はさらに、その前任者たちと道真自身との親密な関係についても詠み及んでいる。すなわち前々任者の安倍興行は兄ともいふべき義の間柄であり、前任者の藤原保則

は父ともいふべき慈を賜った間柄であるとする。年上の安倍興行とは菅家廊下の同門で若い頃から親しく詩の応酬をする中であり、藤原保則もまた菅家廊下に入り出した年長者であったのであろう。この二人の功績を顕彰するとともに、またその遺徳積善によりて、道真自身はその余慶に預かって良き治政ができればと願っているのである。

右の詩と同じ仁和三年の秋、先の長篇の楽府体「路遇白頭翁」に対して、蘭筍売り翁についての詩（228―231）「蘭筍翁問答詩」は七言絶句の問答体である。道真は、このように様々な詩型を用いており、極力、同詩型・同趣旨の作とならないように配慮していたことが窺えるのである。

この蘭筍売り翁との問答詩の最後の詩では、

(231)「重答」

二女三男一老妻 二女三男一老妻

茅簷内外合声啼 茅簷の内外にして声を合せて啼く

今朝幸軟慇懃問 今朝幸ひに軟なり慇懃に問ふこと

扶杖帰時斗米提 杖に扶けられて帰る時斗米を提げたり

とあって、翁が帰るとき「一斗の米を提げていた」とある。もちろん、道真が施したのであるが、これはこの翁が「令義解」「戸令」の「貧窮老疾の自存する能はざるもの」に相当するので、郡司に命じて安養ならしむようにしたというのである。

「蘭筍翁問答詩」と先の「路遇白頭翁」とは、詩境・詩型を異としながらも、道真国司時代の翁問答の詩として好対照をなすものといえる。

六、結語

同じ年の秋、道真は一時帰京するが、その旅中でも、塩商人や漁師らの話に耳を傾けている。

語得塩商意 欲随釣叟声 語り得たり塩商の意 随はんと欲す釣叟の声

此間塵染断 更頼問家情 此の間塵染断つ 更に家情を問ふに頼し

(235) 「宿舟中」

また同時期の作⁽²³⁶⁾「舟行五事」の「一株磯上松」「白頭已釣翁」「区区渡海颺」「海中不繫舟」「疲羸絶粒僧」の詩は、海辺の情景を描述しつつ、身近に見聞した種々の世相に対して厳しく批判的な目をもつてその実態を捉え、道真みずからの今後あるべき処世の仕方について思考を巡らした連作である。世相の実態を見抜こうとするこの道真の厳しい眼差しは、国司としての巡行時のそれと同一のものであった。物珍しい光景を賞翫するというような閑雅な心境とはほど遠く、国司としての気構えを強く遵守し厳しく巡視する道真のようすが読みとれるのである。

なお、翌仁和四年（八八八）の作には、

好去鶯花今已後 好し去れ鶯と花と今より已後

冷心一向勸農蚕 冷しき心もて一向に農蚕を勧めん

(251) 「四年三月廿六日作 到任之三年也」

とあり、また、⁽²⁵⁵⁾「寄雨多県令江維緒一絶」にも、

不雨応縁政不良 雨ふらざるは応に政の良からざるに縁るべし

唯馮大般若経王 唯だ馮むらくは大般若経王

州官県吏更相混 州官県吏更ごも相混り

乙丑同年鬢早霜 乙丑の同年にして鬢に早霜あり

とあって、真摯に政務に励んでいることが窺える。また、この年五月六日、旱魃のため、城山の神に降雨祈願の祭文⁽⁵²⁵⁾「祭城山神文」をしたため、その後、雨が降ると、

(295) 「喜雨」

田父何因賀使君 田父何に因りてか使君を賀す

陰霖六月未前聞 陰霖六月未だ前に聞かず

満衛僚吏雖多俸 満衛の僚吏俸多しと雖も

不若東風一片雲 若かず東風一片の雲には

と、農夫たちとともに喜びをともしているのであった。

以上、「行春詞」を中心に、詩から窺える道真の国司任務の精励ぶりについて述べた。道真は、讃岐守任官を当初は左遷と悲嘆し、任期中もまた旅愁と懐郷の悲哀の念にかられつづけたのであったが、しかし政務は怠ることなく精励忠勤に勤め上げたことが、これら讃州客中詩群によって知られるのである。⁽⁵⁾

注

- (1) 菅原道真の讃岐守任官については、弥永貞三氏「菅原道真の前半生―讃岐時代を中心に―」（川崎庸之編「日本人物史大系」1）、春名宏昭氏「菅原道真の任讃岐守」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』）等。なお、拙稿に「讃岐守時代の道真―『讃州の客意は道を失へるを述べたるなり』―」（『宮廷詩人 菅原道真』）

- (2) 「行春」については、滝川政次郎氏「越中守大伴家持の能登郡巡行」（『万葉律令考』）、「行春詞」については、藤原克己氏「菅原道真の詩と思想」（『菅原道真と平安朝漢文学』）及び三木雅弘・谷口真起子両氏「『行春詞』札記―讃岐守菅原道真の国内巡視―」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』）
- (3) ただし、道真の岳父島田忠臣の美濃介時代に勸農巡視を詠んだ詩がある。『田氏家集』⁽¹¹⁵⁾「和野秀才叙徳吟見寄」「農桑を勸課するは我が力に非ず 只だ応に州境に化して吟詩するのみ 勸課農桑非我力 只応州境化吟詩」⁽¹²⁸⁾「元慶七年冬、美濃大雪。以詩記之」「且く豊歳の瑞を誇張する莫れ 先づは須らく孝廉の家を勞問すべし 且莫誇張豊歳瑞 先須勞問孝廉家」

- (4) 注2に同じ。特に、三木雅弘・谷口真起子両氏「『行春詞』札記―讃岐守菅原道真の国内巡視―」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』）

- (5) 注1の拙稿「讃岐守時代の道真―『讃州の客意は道を失へるを述べたるなり』―」（『宮廷詩人 菅原道真』）その「第三編菅原道真の不遇とその詩境 第一章讃岐時代の四、讃岐行政に対する道真の自己評価」

付 「行春詞」 【口語訳】

春風が人々から愛されるように自分も春風となって、

国内をあまねく巡察して目をこらしてしっかり世情を見ようと思う。

けれども自分の才は愚かなので、ちょうど政務に習熟しないまま国務に就いて国を損なった尹何のようになることをおそれ、

思慮も浅はかなので、能吏の龔遂のように民をよく治めることはできないであろう。

恥じることには、石崇のように蛮勇のみによってこの地に進み出たことであるが、

どうか馮翊に任じられた黄覇のような清廉な政治家と称せられたいものだ。

苔す石の上に坐せば、心は陸にありながら心は深く沈み、

楊柳の花の前においても、戦戦兢兢として氷の上を踏む思いである。

愚かな民たちの拝謁は辞退したいものだが、下役人たちの少々のもてなしは許すでしょう。

身のまわりの筆硯を用いてそぞろに書画を表わし、口をついて出るままに詩句を詠じてつぎることがない。

一事一事に情を厚く筋を通して民をたすけてやり、巡行しながら道すがら今年の稲の豊作を祈るのである。

靈験あらたかな神社では長老の神官が不思議な話を語ってくれ、

歴史ある寺院では長老の僧が奥深い仏教の教義を語ってくれた。

巡行途中の雨を過ごしては、あちこち奔走して国府の倉庫を修繕し、

夕暮れの霽が立ち込めるまで田畑を調査して記録する。

冤罪があるかを確認するため牢獄の囚人を調べ、

悪行や不正の者を寛容の心を持って懲罰する。

身分高い者が卑しく弱い者を従えようとしてはいかないと憂慮し、

独り身の貧しい者が富裕で権勢を誇る者にしいたげられていないかと心配する。

肉を食べることのできない貧しい老人を慰問し、

身よりのない貧窮乏者に救助の手を憐れみ手をさしのべる。

檻樓を纏った人のいる家の門では立ち止まって主人に（どうしてこんなに困窮しているのかと）問いかけてみる。

畑で耕している人には仲間はいろのかと尋ねてみる。

子供たちは竹馬で遊んでいて、郭伋の故事のように国司が来たからと郊外まで迎えることはしないが、

あかざの杖をつく隠者は通りすがりに杖を上げて挨拶してくれる。

天が感応して鄭弘のように白鹿がついてくるようなことは遂にないけれど、

私の国内の評判は幸い蒼鷹のような冷酷な酷吏とは言われていないようだ。

とはいえ、私の政治は拙いので、名声は墜ちているにちがいないであろう。

どうして私の実績が上がって「善最」と評価されようか、それはありえない。

馬の向きを次の巡察地にむけて旅立つ時、朝日は上り、

頭巾だけは郭泰よろしく折れて宿舎に帰る時、夕暮れの雲は湧きおこる。

駅亭のたかどのの上では時を告げる三度の鐘鼓、

公館の窓のうちには一点のともしび。

人々がいなくなつてひとり静かに座っていると感傷的になつて、

夜更けにひとり臥していると涙の湧き上がるのがおさえられない。

この讃州にきて半年、私は「清」と「慎」の両方を心がけてきたが、

残念なのは青く汚れた蠅のような輩がいることである。